

戦後の浦高界隈へタイムスリップ!

●会報「麗和」編集会議を終えて

昨日は午後4時から7時半過ぎまで、浦和高校内にある麗和会館にて4月10日に発行予定の会報「麗和」第3回編集会議(初校の校正)が行われました。会報「麗和」は、浦高在職の校内幹事(浦高OBの教員)7人と同窓会事務局長の藤野龍宏さん(22回)、それに同窓会会員の星野和央さん(4回)、田中 薫さん(11回)、香田(25回)の3人が加わり編集を行っています。



【昨年の会報 58号表紙】

編集は前年12月上旬から始まり、第1回会議で会報の構成を決定して執筆者等へ原稿依頼を行い、2月上旬の第2回会議で原稿を確認、2月下旬に印刷会社へ入稿、3月初旬に初校が出てきて昨日の第3回会議となりました。今回も20ページの紙面に同窓会と会員たちの活動、母校の動きなどを凝縮して発信したいと思います。最年長の星野さんからは「会報

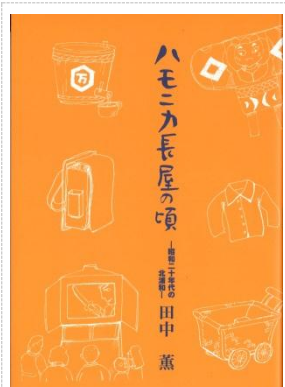
編集では、これまで積み重ねてきた歴史は重んじるもののマンネリに陥らないこと。常に時代にあった記事と編集を考えること。各自が常にアンテナを張って幅広い同窓生たちの活動をキャッチすること。」と発破をかけられています。

これから発行までの3週間に2校、3校と慌ただしく印刷原稿を読み込む日々が続きます。

* *

●ハモニカ長屋?

編集会議を終えて先輩の田中 薫さんから1冊の本を紹介されました。それは田中さんが著された「ハモニカ長屋の頃 -昭和二十年時代の北浦和-」(ききたま出版会刊、写真②)でした。



【田中薫氏著「ハモニカ長屋の頃」】

皆さんは「長屋」というと何を思い出されるでしょうか? 建築的には集合住宅の一つの形態で、複数の住戸が水平方向に連なり壁を共有する建物を指します。そして長屋の条件としては、各戸の玄関が道路などの外界に接していることが求められます。2階建て以上で垂直方向に区分されたものがアパート、マンションなどと呼ばれて長屋と区別されます。

日本では江戸時代の九尺二間の棟割長屋、町人長屋が有名で、今でも下町の狭い路地に面して建てられた木造住宅のイメージをお持ちの方も多いのではないでしょうか。そして、長屋での生活や人々は落語の題材にも多く取り入れられており、そこには庶民の慎ましい生活と温かい人情が溢れています。

私も昭和32年12月(3歳)から昭和42年8月(12歳、小学6年)まで、川口市飯塚町の鋳物工場に囲まれた2戸長屋で暮らしていました。10年に亘り喜怒哀楽を一緒にした隣の家族とは、50年近くが経つ今でも家族ぐるみの付き合いが続いています。

さて、話を本題に戻しましょう。「ハモニカ長屋の頃 -昭和二十年時代の北浦和-」は、県立浦和高校のグラウンドの片隅にあった職員宿舎、通称「ハモニカ長屋」を題材として、ここで育った著者が繊細な少年の目で掬い取った暮らしの断片、北浦和界隈の様子、歴史の移り変わりを綴った回顧録です。

* *

はじめに

昭和二十年秋から、北浦和で過ごした。中学生になるまでの約七年間、だからこれは北浦和界隈での生活記録である。私は四人兄弟、私とすぐ下の男子は戦時中の生まれだが、もう一人の弟と妹は戦後の生まれである。いわゆる団塊の世代、育ったのはハモニカ長屋。

したがってこれは、昭和二十年八月十五日前後から北浦和駅を中心とした領家とその周辺での生活記録である。

ハモニカ長屋は、浦和市領家、浦高の下のグラウンド、野球場の片隅にあった。グラウンド南東の外側には、道路のわきに小さなお宮さんがあった。

そこは紙芝居を始め、さまざまなイベントが行われた子供たちの宝庫だった。そうした楽しい長屋から退去したのは昭和二十七年秋のこと、約七年間をここで過ごした。トイレは水洗ではなく、井戸は庭に掘ったもの。

その長屋で八人の先生と、その家族が暮らしていたが、現在、大部分の先生方は鬼籍に入ってしまった、またその先生方の家族の方とはほとんどお付き合いがないので、それぞれの消息は全くわからない。

昭和二十七年からだ、すでに六十三年、昭和二十年から数えると七十年間もたっている。ずいぶん長くたってしまったものだが、その間にも世の中も私たちの生活も全く大きく変わってしまった。

そのかつての有様を報告しておくことで、この間の暮らしの変化について物語っておくことにしたい。
平成二十七年十一月

* *

それでは懐かしく読み進めたいと思いますが、私にとっての「浦高長屋」は、文化部の部室でした。